

# キリシタン時代の自己認識と他者意識

## ——ルネサンスの文化的・思想的資料から

Self- and Other-Consciousness in the Age of Christian Century:  
From the Cultural and Intellectual Renaissance Sources

根占 献一 (学習院女子大学、日本)

### はじめに

本発表題目にある「自己認識と他者意識」は表裏一体の関係にあり、どちらかだけで良かったのかもしれないが、キリシタン時代というグローバル化にあった社会ではやはり自他との関係が重要であった。本論では特に三人物に注目する。フランシス・ベーコン (1561-1626)、ハビアン不干斎 (Fabian Fukansai [Fucan] 1565-1621)、そしてトマス・ホッブズ (1588-1679) である。

ベーコンは西欧ルネサンスを代表する哲学者であると同時に、このグローバル化を告げる時代の著作を物している。ハビアンはこのベーコンと同時代の日本の「人文主義者」(ヒューマニスト) であり、本発表の主題に三人中最も似つかわしい人物であろう。ハビアンはキリシタン時代にあつて「教理書」を著わした稀有な人物とされる。私自身は教義史や聖書学を専門としていない。本発表では、ルネサンス人文主義の視点からハビアンを検討し、この時代の「自己認識と他者意識」を考えてみたい。最後のホッブズは90年に及ぶ長い生涯となる。そして英国史上最も波乱に満ちた世紀を生き抜いた思想家であった。ここはニュートン (1642-1727) に代表される科学革命の中心地のひとつであり、それはまたプラトン主義の近世的側面を示すケンブリッジ・プラトン主義者たちが活躍した世紀でもあった<sup>(1)</sup>。ホッブズの時代と彼の思想は、日本史上の戦国時代とこれに続く世、キリシタン時代を考察するうえで示唆を受ける点が多い。ホッブズに基づいて為政者をヨーロッパ史あるいは世界史に位置付ける試みを行ってみよう。

### 1、ベーコン

19世紀の幕末以降と違って、そもそもイングランド、英国はどのようにこのキリシタン時代の日本と関わっていたのだろうか。南欧から来た、宣教師中心の「南蛮人」と違い、ここではひとりの俗人が注目されよう。祖国に帰国後、国王ジェームズ一世のもとで官僚、政治家として国璽尚書や大法官に昇りつめたベーコンに來日記録を清書して渡すことになるジョン・セーリス (John Saris 1579or80-1643) のことである。この清書手写本は現在東洋文庫にあり、『日本渡航記』<sup>(2)</sup>と題されている。19世紀英国人で幕末・維新期に大活躍するアーネスト・サトウが印行し、19世紀最後の年に出版された。サトウはキリシタン史、南蛮研究にも寄与していて注目される。

英国人としてはすでに1600年に、ウィリアム・アダムズ (三浦按針) がオランダ船リーフデ (Liefde) 号で来ていた。セーリスは国王からの徳川家康宛外交書簡を携えての來日であった。セーリスにとり、アダムズ存在は心強かったが、セーリスから見ると彼は英国人魂を失いかけて日本人化し、またオランダ人と親しくなりすぎていた。これも他者 (とは言え、元は同郷なのだが) 意識を通して自己を認識していることになろう。外国での出会いはまた異なる発見をもたらしている。

(1) スティーヴン・シェイピン、サイモン・シャッフアー『リヴァイアサンと空気ポンプ——ホッブズ、ボイル、実験的生活』吉本秀之監訳、柴田和宏、坂本邦暢訳、名古屋大学出版会、2016年。

(2) *The Voyage of Captain John Saris to Japan 1613*, edited by Ernest M. Satow, 1900.

アダムズやセーリスらの大航海事業到来の新社会は、ベーコンの『随想録』(Essays)や『学問の発達』(The Advancement of Learning of the Proficiency and Advancement of Learning, Divine and Human)などに如実に反映している。コロンブスの探検と印刷術の展開が時代の画期をなすことを指摘したり、今でもルネサンスの三大発明とされる火薬、羅針盤、活版印刷を併称したりして、その意義を力説しているのがベーコンであった。自らをコロンブスに擬えることもやぶさかではなかった<sup>(3)</sup>。また、未完に終わった『ニュー・アトランシス』(New Atlantis)では出だしにペルーから船出し、行き先は支那と日本であるという表現が見られ、目を引く<sup>(4)</sup>。

『随想録』で取り上げられる真理観、無神論などは時代の思想的特徴を知るうえで役立つ。この『随想録』、エッセイは同時代のフランスのミシェル・モンテーニュ(1533-1592)の『エッセー』(Essais)と比較考察したくなる。先輩格のモンテーニュ同様、ベーコンはヨーロッパ外地域の地理情報同様、増え続ける古典情報を吸収しながら、比較考察の視点を持った穏健な見解を展開する。異教古典の一例として、ルクレティウス『事物の本性について(自然論)』(De rerum natura)があり、ベーコンは良く引用している。ここにはキリスト教とは異なる自然観が披歴されていて、ルネサンス以後影響の大きい古典である。

ベーコンの作品はこれらで尽きるものでなく、ここでは『ノウム・オルガヌム』(Novum Organum. 大論理学)あるいは『大革新』(Instauratio Magna)の有名な扉絵を出し、大航海時代到来を示そう。それは「ベーコンの大きな抱負を示すものとして、象徴的な図版になっている。それは左右の二つの大きな柱の間を大海に出ていく。満風に帆をいっぱいにくらませた一艘の船の絵である。帆は学問を象徴している。その船は帆をいっぱいにくらませて、世界の終わりと考えられていたヘラクレスの柱のごとき門を通り、学問の大海原へ出かけているのである。その下に記されているラテン語はラテン語訳聖書の「ダニエル書」12・4からのもので「多くのものが通り抜けていき、知識は増やされるであろう(Multi pertansibunt & augebitur scientia)というものであった」<sup>(5)</sup>。

こうしてベーコンは「自己認識と他者意識」が深く関連することを示している。

## 2、ハビアン

キリシタン時代は西欧ルネサンスの時期と重なり、大航海時代ゆえにキリスト教も非ヨーロッパ地域に拡大した。ハビアンは1549年にフランシスコ・ザビエル(1506-1552)来日後十数年ほどのちの1565年に加賀あるいは越中に生まれた。当該地域は一向宗の盛んな地域で、織田信長に対する抵抗が強力であった。京都に移住し、禅僧となるも、1583年に母とともにキリスト教洗礼を受けた。母は豊臣秀吉の正室北政所に仕えた女性であった。単に洗礼を受けたにとどまらず、学習意欲の高いハビアンは大阪のセミナリオに入った。更に1586年にイエズス会に入会し、助修士(修道士frater)つまりイルマン(irmão)、日本語で言う同宿(dojuku)、カテキスト(catechist[a ラテン語])となった。長年イエズス会の一員として宣教、布教活動に従事したが、司祭(padre)に任じられることはなかった。

そのようなハビアンを今日名高くしている著作二点がある。『妙貞問答』(Myotei Mondo 1605年)と『破堤宇子』(Ha Daiusu 1620年)である。先の『妙貞問答』では仏教各派、儒教、そして神道に対してキリスト教を擁護し、あとのほうではキリスト教をも攻撃するという全く相反する内容を有している。『破堤宇子』はハビアンの棄教の産物であった。棄教の理由として、ジェノヴァ出身の修道士カルロ・スピノラとの人間関係悪化が考えられている。スピノラはコッレージョ・ロマーノでクリストフォルス・クラヴィウス(1538-1612)に学んだ、理科系のイエズス会宣教師であった<sup>(6)</sup>。また別の理由として、マルティン・ルターの事例を想起さ

(3) 坂本賢三『ベーコン』人類の知的遺産30、講談社、1981年、165頁。上田泰治『ベーコン』世界思想家全書、牧書店、1964年、101頁。

(4) 坂本賢三『ベーコン』325頁。

(5) 『ベーコン』責任編集・解説福原麟太郎、世界の名著20、中央公論社、1970年、51-2頁。上田泰治『ベーコン』96頁に挿図、100-01頁に解説。坂本賢三『ベーコン』83頁では『大革新』扉絵、1730年の最初のベーコン全集ではmonti meliora sequamurとある、と。

(6) 根占献一『東西ルネサンスの邂逅—南蛮と禰寝氏の歴史的世界を求めて』、東信堂、1998年、195-196頁参照。

せるのだが、修道女との恋愛が考えられている。

このようなハビアンゆえに、近年種々の方面から注目されていて、私自身も2016年ボストンでの「米国ルネサンス学会」(Renaissance Society of America 主催) 大会で彼に言及する機会があった<sup>(7)</sup>。『妙貞問答』では「貴理志端之教之大綱」として理性的靈魂、「アニマラショナル」の不滅・不死が説かれ、仏教的な流転輪廻が否定されている<sup>(8)</sup>。私自身、最近、この靈魂不滅をめぐる小著を公にした<sup>(9)</sup>。

キリシタン学の泰斗海老沢有道は『妙貞問答』に内在している問題点を指摘する。それが「邦人イルマンによる唯一の教理書であり、彼の才智のほどを示すなかなかすぐれた著作であるが、キリストの十字架(クルス)による救贖という信条の玄義、その恩寵の体験を欠いていたことは、キリスト教信仰としては致命的欠陥」とし、棄教に至ったのはこの信仰の神髄を把握できなかった当然の帰結、と考えている<sup>(10)</sup>。

海老沢の解釈は、思うに、研究者自身の今日的な、純一キリスト教観からの接近が強すぎではないだろうか。宗教改革以後のプロテスタント的視点に基づいて、伝わった南蛮的なキリスト教が判断されてはいないだろうか。果たして、本発表が問題にする時代にあって、当時の日本のカトリック世界でどこまでそのようなルター化されたアウグスティヌスの視点が歴史的に言いうるものなのか、問題があるように思われる。

再びハビアンの経歴を続けよう。1592年天草にあったイエズス会コレッジのレジデンシア(駐在所)<sup>(11)</sup>にその名が現われる。ラテン語の知識を幾らか持った日本語の達人である、とされてである。『平家物語』簡略版を作成しているのは、解釈能力に秀でた語学の人であることを示そう。『平家物語』は *Nihonno Coto-bato Historia no Narai Xiran to Fossuru Fito no Tameni Xeua ni Yaua Raguetaru Feiqe no Monogatari*<sup>(12)</sup>と題されて、馬之丞(Umanojo)と検校(Kengyo)間の日本語と日本の歴史をめぐる対話となっている。ローマ字で印刷され、1592年に出た。またハビアンはイソップ寓話の部分訳に貢献し、エソポノハブラス(*Esopo no Fabulas*)と題されて印行された。

日本イエズス会のなかでハビアンに期待されたのはこのような語学能力だけではなかった。彼の生い立ちと経歴がこの国の支配的な宗教思想や教義、伝統的な習俗に通暁していた可能性が想定される。残された史料から彼が宗教間の争論、宗論の議論に顔を出していることが了解される。公開の場でキリスト教を擁護して仏教を非難したり、また時には葬礼の場で葬送演説を任されたりした。これは明らかに、ルネサンスの時代のヒューマニスト、人文主義者の役割と同一であり、レトリック、弁論に基づく「フマニタス研究」(*Studia humanitatis*)が日本に浸透している様を示している。

『南蛮寺興廢記』(Nanbanji Kohaiki)に示される梅庵(Baian. ハビアン)と白翁(Hakuo)間の議論には脚色が働いているにしても、高名な儒学者(Neo-Confucianist. 宋明理学者、朱子学者)となる、若き日の林羅山(1583-1657)との議論は事実の核心を突いていることだろう。林家は徳川幕府の官学を支える一門となった。初代の羅山は同幕府初期4代にわたって侍講(Jikou)を務めて徳川体制の倫理的基盤のイデオログであった。羅山によると、1606年、羅山と実弟信澄(Nobuzumi)は松永貞徳(1571-1654)の仲立ちでハビアンと対面し、地球の形状、キリスト教の神や神の創造に関して激論を戦わしたのであった。

この1606年とその前後は明らかにハビアンにとり、宣教活動に力が入った時期であった。『イエズス会年報』によると、1606年に日蓮宗の僧侶と議論を行い、人間靈魂の不滅性と救済を訴えている。多忙な1606年はまた特別な日、記念日には説教を、重要人物の葬儀には演説を行っている。いずれの場合においても仏教が救いをもたらさないと、攻撃することを止めなかった。

(7) Fabian Fucan and Renaissance Syncretism in the West and the East. Saturday, 2 April 2016. また小文は、Kenichi Nejime, Aristotelianism, Platonism and Humanism in Japan's Christian Century, 149-158, in *Bulletin of Gakushuin Women's College*, no. 18, 2016, pp. 149-158.

(8) 海老沢有道、井手勝美、岸野久編『キリシタン教理書』教文館、1993年、394-402頁。

(9) 根占『イタリアルルネサンスとアジア日本—ヒューマニズム・アリストテレス主義・プラトン主義』、知泉書館、2017年。

(10) 海老沢有道『キリシタン南蛮文学入門』、教文館、1991年、257頁。引用文中、救贖は「あがない」と読む。ハビアンが教義学者でなかったことは考慮されるべきであろう。

(11) 今村義孝『天草学林とその時代』天草文化出版社、1990年。

(12) 「日本の言葉とヒストリアのならない知らんと欲する人のために世話にやわらげたる平家の物語」

既述した『妙貞問答』はその前年 1605 年の印行である。三巻からなる妙秀 (Myoshu) と幽貞 (Yutei) の対話編で、最初の巻で仏教反駁、第二巻で儒学と神道反駁、最終巻でキリスト教弁明が行われる。これに相反する著述『破堤宇子』は 15 年後の 1620 年となり、キリスト教棄教ののちに執筆された。それは大きく二部に分かれる。前半部分では七段階を踏んでキリスト教教義の根本が説明されて反論、否定されていく。神概念、アリストテレスに基づく靈魂の種別 (理性的靈魂、感覺的靈魂、植物的靈魂)、人類の墮落、人類救済者としてのキリストの役割、十誡などが取り上げられる。後半部分では主に宣教師の態度と信者の行動からキリスト教の価値に疑問を投げかける。特にこの点は『破堤宇子』の最終章に窺うことができ、棄教理由となる。日本人に対するイエズス会士の傲慢な態度・判断を非難している。ハビアンをイルマン、カテキストに留めたままで司祭にしなかったこともその理由に入っている。ハビアンは 1601 年から 14 年にかけて司祭職に就いた 15 人の日本人のなかに入っていなかった。

『妙貞問答』と『破堤宇子』はイエズス会の学校で学び、ほぼ 20 年にわたるキリスト教宣教生活を過ごした知識人の手になるものである。イルマンになる前は禅僧だったから、双方の教義、奥義を知っていた。禅僧になる前は地元の濃密な仏教的環境にあったことだろう。場合によっては日本では宗教がシンクレティズム状態にあったので、神道的、道教的要素も欠けていなかったかもしれない。このようななかで生まれ育った者がかなりの期間、旧来の信仰から離脱してキリスト教という外来宗教を選択した。この宗教はそれまでの三国観の世界とは別の地域に生まれて発展しており、6 世紀にきた外来宗教、仏教の伝播以来、一千年ぶりに新たな信仰形態を「現地」にもたらした。知的好奇心の強い若者を引き付ける魅力のひとつはその科学的世界観にあった。仏教の須弥山的世界観は非科学的になった。科学革命を準備するヨーロッパの自然科学観もまた伝来していたのである。

ハビアンの意識分析の最後に、ルネサンスの思想研究でしばしば目にする三概念、パリーノディスト (palinodist)、インポストル (impostor)、そしてエクスペロラトル (explorator) の用語を使って説明を試みよう。

『妙貞問答』と『破堤宇子』の間には 15 年の歳月が流れているが、文学形式としてはパリーノディア、前説取り消しの手法を踏んでいる。従って私はこの著作が名高いがゆえにハビアンをパリーノディストと呼びたくなる。肯定したものを否定し、否定したものを肯定する、なかなか舌鋒鋭い、論理・論証の人物である。羅山の伝えるところでは、ハビアンは議論に負けたということになっているのだが、これは割り引いて考えなくてはならないだろう。彼の性格には理屈っぽく、気難しいものがあって、他の日本人イルマンとかなり違って煙たがられて司祭への道を閉ざされてしまったのかもしれない。

ハビアンには、ブッダもシナの賢人 (孔子) もキリスト教の神も、また「地元」の神々もその理論はいずれも完璧でなく、極論すると「詐欺」を働いているように思えた。彼らはこの意味で impostores (impostor の複数形) なのである。ハビアンの思考に特徴的なのは比較論的考察であろう。各宗教、各思想が比較考量されて、いずれかが絶対視されることはない。排他的で絶対性を主張するキリスト教は結局合わなかったということになるだろう<sup>(13)</sup>。キリスト教の属する西欧文明が全面的に否定されているわけではない。

ハビアンは信仰上、思想上において陣営、立場を変えたが、脱走兵 (transfuga) としてでなくスパイ、偵察者 (explorator) として自分に合致する観点を探し求めたのではないだろうか。これはセネカ (Seneca) が使った言葉で当時好まれた句であった。この「合致する観点」とは前述のボストンの発表では当然なこと、自然なもの (the natural) としている。さらに検討が必要だろう。

### 3、ホップズ

ハビアンはフランシス・ベーコンと同時代人であると既に指摘した。さらに生前のハビアンからその死後半世紀間にわたるキリシタン史を世界史のなかで眺めると、ベーコンの秘書を務めた (1620 年頃) トマス・ホップズ思想が重要な意義を有しているように思われる。ホップズは林羅山と同時代人である。本論の最後にホッ

(13) 少なからざる研究者が不干斎ハビアンに取り組んでいるが、以下の論もその有益な一点。Monika Schrimpf, *The Pro- and Anti-Christian Writings of Fucan Fabian (1565-1621)*, in *Japanese Religions*, Vol.33 (1 and 2), pp., 35-54.

ブズに少々触れることは、「鎖国」を実行した主権者徳川幕府の取った方針を理解する助けになる。キリシタン史は信者たちにとり殉教史ともなり、キリシタン禁令は豊臣・徳川の圧政を印象付ける嫌いがあるものの、世界史的な視座も「絶対主義社会」のなかでは不可欠であろう。

ホッブズはスペインの無敵艦隊来襲の年に生まれ、既述したように若い頃は功成り遂げたベーコンの秘書——ラテン語能力に秀でていた——をしていた。イギリス革命（ピューリタン革命）——島原の乱の直後に勃発——に遭遇し、国王チャールズ一世の首級が挙げられた動乱時代を経験する。それは『リヴァイアサン』（*Leviathan*）や『ビヒモス』（*Behemoth*）という著述となり、オリジナルに満ちた力強い思索が展開される。

ベーコンはルネサンス、所謂文芸復興の哲学を英国で展開し、近代思想の幕開けをもたらしていた。ところが、彼以後襲来した英国内の政治・宗教の荒波は、次世代の旗手の一人となるホッブズの政治哲学を鍛え上げずにはおかなかった。古代の原子論、懐疑論哲学はホッブズにあってはベーコン以上に影響が大きく、その科学観のみならず国家観にも顕著に反映される。キリスト教的思惟と教皇（法王）を頂点とするローマ・カトリックに対する反発は強烈で、政治の主権でもって宗教の専断が限定、制限されなくてはならなかった。『リヴァイアサン』最終章には次のような文が見られる。

「…法王制と妖精の王国との類似は、つぎのことがつけくわえられていい。すなわち、妖精たちが、老婆または老詩人の伝説から生じた無知な人びととの空想のなかにしか実在性をもたないように、法王の霊的な力も（かれ自身の政治的領土の境界のそとでは）、まどわされた人びとが虚偽の奇跡や虚偽の伝説や虚偽の聖書解釈をきいて、かれらの破門にたいしていただく恐怖のなかにしかないのである。したがって、ヘンリ 8 世がかれの悪魔はらいによって、エリザベス女王が彼女のそれによって、かれらをおいはらうのは、非常に困難な事柄ではなかった。しかし、いまは出て行って、伝道の指名をうけて、シナ、日本およびインド諸国という、かれらにわずかしか果実をもたらさぬ乾燥地方をあるきまわっている。このローマの霊が、ふたたびかえってくること、あるいはむしろかれよりわるい諸霊の合議体がいりこんで、このきよめられた家にすみつき、その結末をはじめより悪くすることが、ありえないとだれがしているだろう。なぜなら、神の王国がこの世のものであると主張し、そのことによって、この世で政治国家の権力と区別された権力をもつべきだと主張するのは、ローマの聖職者だけではないからである。そして以上が、政治学説にかんして、わたくしがいおうと企図したすべてである。わたくしは、それを総括しおえたなら、すすんでわたくしの国の批判にさらすであろう。」<sup>(14)</sup>

ホッブズは目に見えない霊と称されるもの、聖霊も幽霊もその存在——アリストテレス哲学に基づいて非物的実体とされたもの——を信じることはなく<sup>(15)</sup>、これゆえにホッブズの政治理論は禁教令を敷く豊臣政権や徳川政権には歓迎されたことだろう。またこのようなホッブズ哲学とハビアン不干の思考には共通項もあるように見受けられる。今後の検討課題としたい。

(14) Thomas Hobbes, *Leviathan*, 3. The English and Latin Texts (ii), edited by Noel Malcolm, Oxford 2012, pp. 1122-1125. ホッブズ『リヴァイアサン』水田洋訳、岩波文庫 4、153-54 頁。

(15) D. P. Walker, *Decline of Hell. Seventeenth-Century Discussions of Eternal Torment*, Chicago 1964.